



昭和32年の青森ねぶた（青森港まつり） 県史編さんグループ所蔵

青森市街の夕暮れ時、どこからともなく聞こえてくる笛・太鼓の音に心躍る季節がやってきた。このような夏が何度繰り返されてきたのだろうか。最も古いと思われるねぶたの記録は、享保7年（1722）に弘前で津軽五代藩主信寿公がねぶたを上覧したというものである。現在の青森市域に限ると、さらに120年にも下った天保13年（1844）

## 幕末の青森ねぶた

清野耕司

（県民生活文化課県史編さんグループ）

2)の（飢饉の影響か）町内のねぶたは出ず、子供ねぶただけが出たという記録が最も古いようだ。ただし、青森ねぶた祭の解説書には、出典が明示されていないものの享保年間には大浜（現在の青森市油川）で弘前のまねをしてねぶたを担いで踊り騒いだとするものもあるが、真偽のほどは定かでない。

ぶたの古記録は幕末に集中しており、世情が騒然とする中で青森ねぶたの様子を垣間見ることができ、天保14年（1843）には、やはり飢饉の影響か、藩から七夕祭のねぶたを差し止めるよう沙汰があったが、禁を犯して全ての町内からねぶたが出たので、各町の名主全員が戸締め（門を釘付けしての謹慎）になつて、弘化3年（1846）

は、久々の豊作でここ何年かの中で最もにぎやかで町中に多くのねぶたが出た。嘉永3年（1850）にも、3月に津軽藩領平館沖合に異国船が現れる中、7月にはねぶたお差し止めになつたが、またまた勝手にねぶたを出したため、代表者と全町が謹慎処分となつた。さらに、安政元年（1854）には、安方町 上米町のねぶたがあまりに大きく、黒船来襲など国家非常の時節をわきまえない不届きなことであるとして両町のものが処分を受けている。この後も、ねぶたは年毎に盛況であったり、麻疹の大流行で出なかつたりを繰り返す。文久3年（1863）は、景気好転の兆しは見られなかつたものの、ねぶたの季節を迎えるにつれて人々の気分も高まり、逆にねぶたは盛大で、特に7日は快晴で堤川での「ねぶた流し」にも近郷近在から人々が集まつたという。こうして明治維新を迎え、明治2年（1869）には大型ねぶたの記録があり、新町の「牛若、鼻天狗」のねぶたは高さ十一間（約20メートル）と記されている。現在の五所川原の立佞武多を彷彿とさせる。このように、青森の人々は幕末の不安定な時代にあつて、何度禁止令が出てもねぶたを出し、何度処分されてもねぶたを出し、よほどのことがない限りねぶたを出し続けたのである。青森の人々にとって、ねぶたとは何なのか、幕末の記録が物語っているのかも知れない。